

## 世界遺産ガイド [2]

# マカオ

25カ所の歴史的建築群と市街地からなる世界遺産「ヒストリック・センター・オブ・マカオ」。マカオの骨格を形作った教会を概観した前回に続き、18世紀から19世紀にかけて世界有数の国際都市に上り詰めた栄華の足跡を拾う。 笠原宗彦 文 東昇 写真



ギア要塞・灯台 街を一望できる場所にあり、灯台ははまだ現役

16世紀半ばからマカオに定住したポルトガル人は、アフリカやインドの占領地で行ったと同様に、防衛のための城壁を居住地の周りにめぐらせ、大規模な砲台を築いた。城壁築造は1569年に始められたが、時の明政府はこれを許さず城壁を解体。だが、ポルトガル人は役人に賄賂を渡すなどして執拗に築き直し、1632年までには、大砲台ことモンテの砦を中心に東西南北と連結した城壁を完成させた。

聖ポール天主堂跡の脇に旧城壁の一部がかるうじて残る。高さ5・6メートル、長さ18・5メートル。粘土に砂、わら、砕いた石や蜃の殻が混ざっており、中国式の工法で造られたことが分かる。

### オランダを撃退した砦

ポルトガル人は城壁築造の言い訳に、オランダの脅威を強調したというが、それはあながち誇張ではなかった。

16世紀末、スペイン支配から脱したオランダは1602年に東インド会社を設立するなどして東洋貿易に進出した。その手法は他国の占領地を武力で侵略し、航路を横取りするという



民政総署大樓 ロビーや中庭を自由に見学できる



仁慈堂 仁慈堂の歴史を紹介する博物館を併設



カーサ庭園 建物内では東方基金会の所蔵品を展示

移っていく。 ■

たポルトガル人を中心に構成され、マカオ行政の舵をとった。ポルトガルがスペインに併合されていた60年間もポルトガル国旗を降ろさず、その反面、本国から派遣されたポルトガル人総督とさえ反目することが多かったという逸話は、彼らの自治意識がいかに強かったかを物語る。

### 集中した欧米の商社

中国から干渉されることの少ない西洋式の行政システムがあり、そしてなによりも中国ビジネスへ通じる唯一の入口という事実が、ポルトガル以外の欧米諸国の貿易会社や商人をも引き寄

のベルッキオ・カルネイロが、1569年に創立。欧米系の慈善団体としてはアジア最古という。1905年に改築された現在の姿は、新古典主義の中にルネサンス後期のマニエリスムの香りを漂わせる。

せ、マカオの国際性をいっそう高めた。艦隊によるマカオ侵入で失敗を重ねた英国は18世紀後半、英国東インド会社事務所を開設。1785年にはポルトガル商人が別荘として建てたカーサ庭園を借りている。隣接して1821年に造成された新教徒墓地には、東インド会社職員をはじめ英米のプロテスタントたちが眠る。27年間マカオに暮らし、1852年に没した英国人画家、ジョージ・チナリーの墓もここにある。英国系ではほかにジャーディン&マセソン商会、デント商会が、米国系ではラッセル商会が19世紀のマカオに進

出。かつての天敵だったオランダ東インド会社でさえも、マカオの地の利の魅力にあらがえずその支社を置いた。そうした商社の裕福な社員たちは、半島の南、海を望む斜面に建設された壮麗な邸宅に居住。マカオ唯一の高級住宅地が形成されていった。斜面北側に平行して伸びる龍嵩街。この通りが当時のマカオでいちばんにぎやかだった。ポルトガル名「ルア・セントラル」(中央街)がその名残を伝える。通りに沿っては、商社社員の家族を相手にする高級衣料店や宝飾店が連なり、西洋人女性たちがウインドウショッピングする姿が見受けられたという。また、娯楽施設では1860年、通りからほど近い所にドン・ペドロ5世劇場が中国初の西洋式劇場として落成。ミュージカルなどが上演された。名実ともに国際都市マカオが輝いた時代。だが、衰退の時も静かに近づいていた。1841年、アヘン戦争に勝利した英国が、清朝政府に香港島割譲と中国沿岸5港の開港を承諾させる。これにより、中国貿易におけるマカオの優位性は失われ、主軸は香港へと



モンテの岩 オランダを撃退した岩は小さな公園に整備され、現在は市民の憩いの場となっている。内部につくられたマカオ博物館はマカオの歴史を展示

手荒いもので、ポルトガルが持つアジアの貿易拠点も次々に奪われていった。当時ポルトガルはスペインに併合(1580~1640年)されていたため目の敵にされ、海上での貨物略奪も珍しくなかったという。無論、世界で最も栄えた貿易都市のひとつとなっていたマカオは垂涎(すだば)的。オランダは数回にわたり、時に英国と連合してまで攻撃したのだが、その固い守りをついぞ崩せなかった。マカオがオランダから受けた最大規模の攻撃は1622年のもので、このときの攻防の要となったのがモンテの岩だ。1617年に建設が始められ、9年の間に増改築が繰り返された。最上部の面積1万平方メートル、32門の大砲のほか、弾薬庫、兵器庫、兵舎、井戸を備え、包囲されても2年は耐える能力があるといわれた。1622年の戦いで海上防衛の重要性を再認識したマカオ政府は同年、外洋に面したギアの丘に要塞の建設を始める。設計には、天才軍事技師といわれたフランス人ヴォーバンの「敵に見せる姿は最小限に、攻撃範囲は最大限に」という理論を実践。だが、半島で最も高い海拔90メートルの立地から、

完成後は不審な船を発見したときに号砲を撃つ見張り台としての役目が主となった。砲台上には同時に建てられた小さな教会と、1864年に完成した灯台が仲良く並ぶ。灯台は中国沿岸では初めての近代的灯台で、燃料は初期は灯油、その後、ヤシ油となり、1910年に電気に切り替わった。高度自治の象徴 海軍力で大きく劣ったポルトガルが、その貿易拠点をオランダに奪われていったのはある意味当然。だが、そんな状況の中でもマカオは生き残った。その背景にはポルトガル人植民開始直後の1585年に組織された議会「レアル・セナド」による高度な自治統治力と、中国貿易の玄関口として蓄積した莫大な富があった。これらが直接に間接に力を発揮し、他国の侵略をはねつけたのだろう。現在の民政総署大樓が、かつてのレアル・セナド議事堂。元は中国側が政令をポルトガル人に伝えるための中国式建築があつたという。1784年に改築され、1874年に現在の姿に。レアル・セナドは中国との交渉に長け